

# 接触場面の自然会話における「なんか」の機能のポライトネス効果

—ディスコース・ポライトネス理論の観点から—

黄 美花

(東京外国語大学大学院博士後期課程)

## 要 旨

本稿は日本語母語話者と中国人日本語学習者の接触場面の日本語会話における「なんか」を取りあげ、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みのなかでその機能のポライトネス効果について考察したものである。「なんか」の使用例を、定量的分析と定性的分析を組み合わせた総合的会話分析の手法を用いて分析・考察した。本稿で扱う会話データにおいて、日本語母語話者と中国語母語話者の「なんか」の使用は量的にも質的にも違いを見せている。本稿では、その違いに着目してディスコース・ポライトネス理論の観点から「なんか」のポライトネス効果について検証した。結果的に、日本語母語話者の発話には対人調節機能を効果的に果たすプラス効果をもつ「なんか」の使用が見られるのに対し、中国語母語話者の発話にはプラス効果をもつ「なんか」の使用が見られず、ニュートラル効果になる「なんか」の使用のみ見られるという違いが明らかになった。

## 1. はじめに

本稿では会話のなかに頻繁に現れる「なんか」を取りあげる。会話のなかで使われる「なんか」は、代名詞あるいは副助詞の「なんか」の用法とは違った機能をもつ言葉として文法化されている。

内田 (2001) は、日本語母語話者同士の自然会話のデータを基に、「なんか」は単なる口ぐせではなく、前置きのディスコース・マーカーであると結論を出した。ここでいうディスコース・マーカーとは、その時点で話される命題に対する話し手の判断や態度、あるいは、会話を維持する際の話し手による行為を表わすものと定義されている。内田 (2001) は、前置き表現の「なんか」を、会話の中で使われる場所や「なんか」の前後に来る事柄が示す内容を考慮して、「話題開始」、「話題の展開」、「発話内容の具体化」、「次の部分へのつなぎ」、「引用」、「話題対象への評価」の6つの機能に分類して、6つの機能はいずれも聞き手にとって新しい内容を後に伴い、話し手の判断や態度、会話維持のための話し手の行

為を示していて、「なんか」はディスコース・マーカーであると結論付けた。

林 (2006) は、日本語母語話者の女子大学生の初対面の会話から用例を収集し、会話特有の表現の「なんか」は、本来の副詞的用法の機能が弱まり (漂白化)、ディスコース・マーカーとしての機能が強まるという仮説を検証した。林 (2006) は、文法化の過程の1つである「漂白化」について検証したが、ここで「文法化は、内容語 (動詞や名詞など) が機能語 (助詞など) に通時的に変化すること」、「漂白化は、意味の弱化あるいは消失を言うが、反対に意味の一般化、また意味の縮小とも言う」と定義している。

飯尾 (2006) は、日本語母語話者の女子短大生の会話における「なんか」の用例を分析し、会話特有の機能をもつ言葉として文法化した「なんか」は、会話の和らげ (softener)、つなぎ語 (filler)、発話権の獲得 (turn initiator) の機能があると分類した。飯島 (2006) はまた、「普段の会話の中から『なんか』を取り除いてしまうと話がぎくしゃくしてしまい、唐突で不自然な感じがする、インフォーマルな場面においては会話の潤滑油の役目をしており、なくてはならない存在のようだ、若者の話し言葉に多く使われるのは、ある意味では彼らの感性に合った言葉である」と考察している。

先行研究を概観すると、「なんか」がディスコース・マーカーの一つであることが、共通して認められている。また、「なんか」の機能についても、「話題」あるいは「和らげ」等の視点から考察が行われている。しかし、機能の分類基準が明確に書かれていないこと、また機能だけに焦点をあてたことが問題点としてあげられる。会話という相互作用の行為において、話し手の判断や態度に重きをおいた機能だけではなく、話し手の発話を受けての聞き手の反応、つまり聞き手からみた効果の部分も取りあげるべきである。よって、本稿では聞き手からみた効果をも考察するため、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みのなかで「なんか」の機能の使用効果を検証する。

本稿ではまず、話者ごとの「なんか」の使用頻度や割合、「なんか」を含む発話文数が総発話文数に占める割合等を示す。次に、発話文のなかで「なんか」が具体的にどのように使われていて、その機能がどのように使い分けられ、それがどのような効果をもたらしかについて例をあげながら考える。その際に、ディスコース・ポライトネス理論の枠組みのなかで「なんか」のポライトネス効果を検証する。最後に、日本語教育で「なんか」をどのように提示できるかについて「場面設定」とともに提案する。

## 2. 理論的枠組み

ここでは、2.1. Brown & Levinson によるポライトネス理論、及び 2.2. 宇佐美によるディスコース・ポライトネス理論の枠組みについて説明する。

### 2.1. Brown & Levinson によるポライトネス理論

Brown & Levinson (1987: 62) は、「フェイス (Face)」という概念を導入し、社会の一般的な成員 (Model Person) には「ポジティブ・フェイス (Positive Face)」と「ネガティブ・フェイス (Negative Face)」の二つの基本的な欲求があるとした。彼らの主張をまとめると、

「ポジティブ・フェイス」とは、他人（相手）に好かれたい、認められたいという欲求であり、「ネガティブ・フェイス」とは、他人（相手）に邪魔されたくないという欲求である。そして、社会の成員は、お互いがもつそれらの欲求を満たそうとして、様々なポライトネス・ストラテジーを用いるとしている。つまり、「ポライトネス」を、フェイス保持のためのストラテジーとして位置づけたのである。

Brown & Levinson (1987) は、様々な行為の中には、命令・提案・脅迫など根本的にフェイスを脅かす性質を持つものがある、と述べている。このような行為は、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為 (FTA: Face Threatening Acts)」と呼ばれ、どのポライトネス・ストラテジーをとるかはフェイス侵害の程度によって決まる、と述べている。この、フェイス侵害度は具体的に数量化できるわけではないが、3つの要素によって規定されるとして、図1のように公式化している。

$$W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$$

W<sub>x</sub>: フェイス侵害度 (FT 度)      S: 話し手      H: 聞き手  
D: 話し手と聞き手の社会的な距離 (social distance)  
P: 聞き手の話し手に対する力 (power)  
R<sub>x</sub>: 特定の文化において、ある行為 (x) が聞き手にかける負担の度合い  
(absolute ranking of imposition in the particular culture)

図1 フェイス侵害度の見積もり公式 (Brown & Levinson 1987)

ポライトネス・ストラテジーは、「話し手と聞き手の社会的な距離 (D)」、「聞き手の話し手に対する力 (P)」、「特定の文化において、ある行為 x が聞き手にかける負担の度合い (R)」の総和によって見積もられたフェイス侵害度の大きさに応じて使い分けられる。話し手によって見積もられたフェイス侵害度が大きければ大きいほど、よりポライトなストラテジーが必要になる。

## 2.2. 宇佐美によるディスコース・ポライトネス理論

宇佐美 (1998, 2001, 2002 等) は、Brown & Levinson (1987) の基本的な枠組みを支持したうえで、ポライトネスを談話レベルで捉えることを主張し、「ディスコース・ポライトネス (Discourse Politeness) 理論」を提唱している。(以下、DP 理論と略記)

DP 理論には7つの鍵概念がある。(1) ディスコース・ポライトネス (2) 基本状態 (3) 有標ポライトネスと無標ポライトネス (4) 有標行動と無標行動 (5) ポライトネス効果 (6) 見積もり差と行動の適切性、ポライトネス効果の関係 (7) 相対的ポライトネスと絶対的ポライトネス。以下、それぞれの概念について宇佐美 (2008a, 2008b) に基づき簡単に説明する。

### 2.2.1. 「ディスコース・ポライトネス (discourse politeness)」

「ディスコース・ポライトネス」とは、一文レベル、一発話行為レベルでは捉えることのできない、より長い談話レベルにおける要素、及び、文レベルの要素も含めた諸要素が、語用論的ポライトネスに果たす機能のダイナミクスの総体であると定義されている (宇佐美 2001, 2002; Usami, 2002)

### 2.2.2. 「基本状態 (default)」

「基本状態」は DP 理論の最も重要な点の一つである。特定の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要があるものである。この「基本状態」を「媒介変数 (parameter)」として扱うことによって、「ポライトネス効果を相対的に捉える」ということが、より具体化して理論に組み込まれた。(宇佐美, 2008a: 160)

「基本状態」には、以下の2種類がある。

- ・ 特定の「活動の型」における談話の「失礼のない典型的な状態」
- ・ その談話の基本状態を構成する要素としての「特定の言語行動や言語項目それぞれの典型的な状態」

そして、「基本状態」として捉えるものとして、数多くの同じ活動の型の「失礼のない状態の談話」における「主要な言語行動の平均的な構成比率 (分布)」、**「各々の要素の平均的な生起率」**、「典型的な談話展開パターン」といったものが挙げられている。

### 2.2.3. 「有標ポライトネス (marked politeness)」と「無標ポライトネス (unmarked politeness)」

Brown & Levinson (1987) のポライトネス理論では依頼行為などのように、相手のフェイスを脅かす「フェイス侵害行為」を行わざるを得ないときに、「相手のフェイス侵害度を少しでも軽減するためにとるストラテジー」としてポライトネスが捉えられていると位置づけている。しかし、我々の日常生活には、「フェイス侵害度行為」にかかわらないタイプのポライトネスもある。それは、「特定の状況で、あって当たり前で、それが現れないときに初めてそれが無いことが意識され、ポライトではないと捉えられる」という類のものである。

DP 理論ではこの両者を区別し、前者のような「フェイス侵害度の軽減行為」としてのポライトネスを「有標ポライトネス」と呼び、後者のようなタイプのポライトネスを「無標ポライトネス」と呼ぶ。(2) で述べられている談話の「基本状態」は、「ポライトネス」の観点からは、「無標ポライトネス (相手のフェイスを侵害しない状態)」であると捉えることができる。

### 2.2.4. 有標行動 (marked behavior) と無標行動 (unmarked behavior)

(3) で述べられている「有標ポライトネス」と「無標ポライトネス」は、ポライトネスの観点から見た状態であり、談話の「基本状態」は「無標ポライトネス」である。そして、談話の「基本状態」を構成する要素としての言語行動を「無標行動」、各々の要素の基本状態から離脱する言語行動、或いは、基本状態とは異なる談話レベルから見た一連の行動を、「有標行動」と呼ぶ。

### 2.2.5. ポライトネス効果 (politeness effect)

(2) や (4) で述べられているように、談話の基本状態を構成する要素の何かが欠けたり、バランスが崩れたりした場合は、それが意識され、ポライトネスの観点から何らかの効果が生まれると考えられる。DP 理論において、この「ポライトネス効果」とは、「談話の基本状態や話し手の言語行動、選択されたストラテジーに対する話し手と聞き手の『見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)』によって引き起こされる聞き手側からの認知を表わしている。ポライトネス効果には、①プラス効果、②ニュートラル効果、③マイナス効果の3つがあるとされる。プラス効果、マイナス効果は、「心地よい」という効果、「不愉快」な効果と言い換えることができる。「ニュートラル」な効果とは、ポライトネス効果の観点からは、特に心地よいというわけでもなく不愉快でもないということである。

### 2.2.6. 「見積もり差 (Discrepancy in estimations: De 値)」と「行動の適切性 (appropriateness of behavior)」, 「ポライトネス効果 (politeness effect)」の関係

「見積もり差 (De 値)」は、もちろん、絶対的な数値として算出できるわけではないが、以下の図2に示すように、0 を挟む -1 から +1 までの一つの連続線上に分布すると仮定することによって、体系的に捉えることができるとされている。

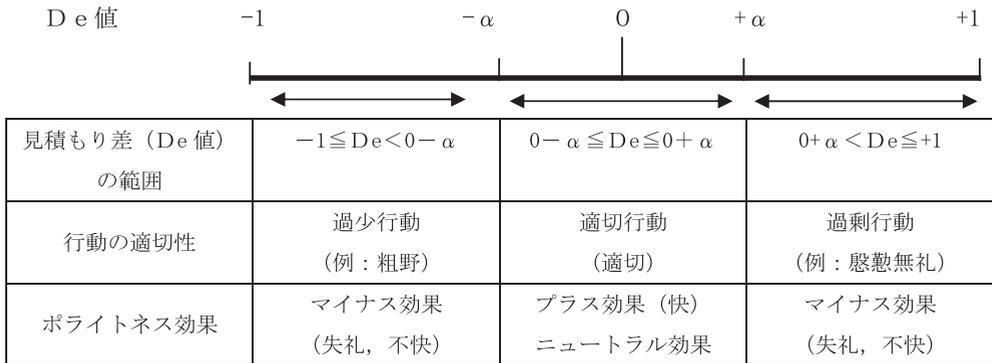


図2 「見積もり差 (De 値)」, 「行動の適切性」, 「ポライトネス効果」 (宇佐美, 2008a: 162)

見積もり差 (**Discrepancy in estimations: De 値**) :  $De = Se - He$

Se : 話し手 (Speaker) の「見積もり (estimation)」 (以下の\*参照)。仮に、0 から 1 の間の数値で表すものとする。

He : 聞き手 (Hearer) の「見積もり (estimation)」。仮に、0 から 1 の間の数値で表すものとする。

α : 許容できるずれ幅

「見積もり (estimation)」には、以下の3種がある。

- ① 「ある有標行動のフェイス侵害度」の見積もり
- ② 「談話の基本状態」が何であるかについての見積もり

③ 「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」についての見積もり

「行動の適切性」の観点からは、見積もり差とポライトネス効果の関係は以下のようにまとめられる。

- ・ 話し手と聞き手の「見積もり差」が、0か、「許容できるずれ幅 ( $\pm\alpha$ )」の範囲内に収まる行動は、「適切行動」とみなされ不快感をもたらさない。ポライトネス効果の観点からは、プラス効果を生むか、ニュートラル効果になる。
- ・ 話し手の見積もりが聞き手の見積もりよりも「許容できるずれ幅 ( $\alpha$ )」を超えない場合は、「過少行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果（失礼，不快）を生む。
- ・ 話し手の見積もりが、聞き手の見積もりよりも、許容できるずれ幅 ( $\alpha$ ) を超えて多い場合は「過剰行動」となり、ポライトネス効果の観点からは、マイナス効果（慇懃無礼，失礼，不快）を生む。

2.2.7 「相対的ポライトネス (relative politeness)」と「絶対的ポライトネス (absolute politeness)」

「絶対的ポライトネス」とは、「行く」より「いらっしゃる」のほうが丁寧度が高い、というような言語形式に焦点をあてた研究や、その他の条件が一定ならば直接的表現より間接的表現のほうがより丁寧であるというような捉え方である。しかし、現実には、「敬語」の使用がかえって皮肉やいやみになるということも起こる。これに対し、「相対的ポライトネス」とは、以下のような捉え方である。

つまり、実質的に「ポライトネスの効果」を生み出すのは、「言語形式」それ自体の丁寧度ではなく、ある特定の「談話」の「基本状態」からの離脱や回帰という言語行動の「動き」や、特定の場面においてどのような言語行動が適当であると考えているかという「基本状態」、当該の言語行動や談話行動の有標性の度合い、及び「フェイス侵害度に応じて選択されたポライトネス・ストラテジー」の話し手と聞き手の「見積もり差（ずれ）」から生まれるということが分かる。これが、「相対的ポライトネス」という捉え方である。宇佐美 (2008a: 164)

見積もり差とポライトネス効果、および「相対的ポライトネス」という捉え方により、DP理論は、「円滑な人間関係を確立・維持するための言語行動としてのポライトネスだけではなく、『失礼』『無礼』『慇懃無礼』といった行動も、マイナス・ポライトネスとして、同一の枠組みで捉える」ものとなっている。

3. 研究方法

ここでは、会話データ、用例収集、及び分析方法について述べる。

### 3.1. 会話データ

宇佐美監修 (2007a, 2007b) に収録されている接触場面の日本語会話 3 会話 (計 30 分間) に現れる「なんか」を研究対象とする。会話データの概要を表 1 に示す。

表 1 会話データの概要 (初対面女性雑談)

会話	話者関係	性別組合せ	社会的属性	文字化時間 (分)	発話文数
中国人 1 - 日本人 1	初対面	女女	学生	10	427
中国人 2 - 日本人 2	初対面	女女	学生	10	417
中国人 3 - 日本人 3	初対面	女女	学生	10	428
計				30	1272

日本語非母語話者との接触頻度が高い 20 代前半の日本人女性が、対同世代の中国語母語話者との会話である。中国語母語話者は、日本の大学院に在籍している女子留学生で、日本語レベルは上級、超級である。会話の総発話文数は 1272 ラインである。

### 3.2. 用例収集

会話データから「なんか」を含む発話文を検索し、全部で 46 例の「なんか」を抽出した。46 例のうち、日本語母語話者の使用例が 41 例、中国語母語話者の使用例が 5 例である。話者ごとの「なんか」の使用頻度及び割合を表 2 に示す。

表 2 話者ごとの「なんか」の使用頻度及び割合

会話	中国人	日本人	計
中国人 1 - 日本人 1	2 (15.4%)	11 (84.6%)	13 (100%)
中国人 2 - 日本人 2	1 (16.7%)	5 (83.3%)	6 (100%)
中国人 3 - 日本人 3	2 (7.4%)	25 (92.6%)	27 (100%)
計	5 (10.9%)	41 (89.1%)	46 (100%)

### 3.3. 分析方法

収集した「なんか」の例を、定量的処理ができるように分析項目 (機能分類項目) をコーディングする。相互作用における定性的分析をコーディングに反映させ、定量的な分析ができるようにする。機能分類の際に、まず談話機能を持つか否かによって分類する。次に、談話機能を持つ「なんか」を (1) 発話権の獲得を和らげる「なんか」、(2) 発話権の維持を示す「なんか」、(3) 問つなぎを示す「なんか」、(4) 引用を示す「なんか」に分類する。談話機能を持つ「なんか」を分類する際に、「話者交替」を分類基準とする。

コーディングの「信頼性」は「評定者間信頼性係数」(Cohen's Kappa) を求めて判断する。

評定者間信頼性係数は、二者間の評定の単純な一致から偶然の一致を差し引いた数値 ( $\kappa$ ) である。

$$\kappa = P_0 - P_c / 1 - P_c$$

この公式で、 $P_0$  は実際に観察された比率であり、 $P_c$  は偶然による比率である。この数値 ( $\kappa$ ) について、宇佐美 (2008a) では、0.75 以上は信頼性が高いと見なしてよいとされている。本稿における  $\kappa$  は、0.80 である。

#### 4. 「なんか」の機能

まず、46 例の「なんか」を、談話機能を持つか否かによって分類した。

談話機能を持つ「なんか」は、例 1 のように会話特有の表現の「なんか」を指す。

##### 例 1) 談話機能を持つ「なんか」

295	282	*	IF04	すごい、この鍋とか<2人笑い>。
296	283	*	IF03	でもあれってほんとー、キャンプ通は絶対持ってるんでしょー。
297	284	*	IF04	うん、らしいね。
298	285	*	IF03	ねー。
299	286	*	IF04	<u>なんか</u> すごーかったー。

##### 例 2) 代名詞の「なんか」の例

206	185	*	JPF04	<u>なんか</u> あった?、男で損したこと=。
207	186	*	JPF04	=でも派遣もさ、別に(####)居心地が悪いだけで、損ってことはないんじゃないの?。
208	187	*	JPM04	損っていうことはないね。
209	188	*	JPF04	うーん。

##### 例 3) 副助詞の「なんか」の例

131	122	*	JBM01	私 <u>なんか</u> 、あんまり、その電車に乗ってる時間が、有効に使えないタイプというか、(うーん)、普通、普段は、勉強したりとか(あー)本を読んだりするんでしょうけど(あ、はあはあ)、その時間が(うんうん)たくさんある人は=。
132	123	*	JBM01	=私 <u>なんか</u> 、あんまり集中できないというか=。
133	124	*	JSM02	=僕もそうですね、ええ。
134	125	*	JBM01	だからうん、ちょっと嫌だな<笑い>。
135	126	*	JSM02	もったいないですよ<笑い>。

例 2) と例 3) のような代名詞あるいは副助詞の「なんか」は、談話機能を持たない「なんか」に分類した。本会話データにおいて副助詞の「なんか」の例のみ現れた。

談話機能の有無による分類結果を表 3 に示す。

表3 談話機能の有無による分類

分類	頻度	割合 (%)
談話機能を持つ「なんか」	41	89.1
副助詞の「なんか」	5	10.9
計	46	100

本稿では談話機能を持つ41例を用いて分析を行う。

次に、談話機能を持つ「なんか」を「話者交替」の有無を分類基準として、(1) 発話権の獲得を和らげる「なんか」、(2) 発話権の維持を示す「なんか」、(3) 間つなぎを示す「なんか」、(4) 引用を示す「なんか」に分類した。「話者交替」の有無を分類基準とする理由は、話者交替が行われる際に、発話権の交替も行われるからである。

以下にそれぞれの分類の定義及び例をあげる。

#### 4.1. 発話権の獲得を和らげる「なんか」

定義：新しい話題の導入や前の発話と関連性を持たせながらその話題を展開していく場面で話者交替が行われて、その際に相手からの発話権の獲得を和らげる前置きとして使われる「なんか」である。「なんか」が現れる位置は、文頭のみである。

例4)

274	252	*	BA02	大学、向こうにいるときから、(うん) 日本語はずっとなら、大学とかでやってて。
275	253	*	NNU	うん、4年間。
276	254	*	BA02	なんか、どうです？、日本に来て、とか言って<笑い>。

#### 4.2. 発話権の維持を示す「なんか」

定義：話者交替はせず、同一話者による新しい話題の導入あるいは同じ話題を維持するための前置き表現として使われる「なんか」である。この場合、「なんか」が現れる位置は文頭のみである。

例5)

536	476	*	NNM	でも、好きな曲は、<ある> < 。
537	477	*	BA03	<あっ> < 、いいね、いいね。
538	478	*	BA03	なんか、他の外国の歌手とかで好きな人とかは？。

#### 4.3. 間つなぎを示す「なんか」

定義：次の言葉を準備する時間的余裕を作り出したり、適切な言葉がすぐ出てこない時に時間を稼ごうとする時に使われる「なんか」である。この場合、話者交替はせず、同一

話者の発話の中で、「なんか」が文頭か文中に現れるが、沈黙など「間」をもつ。

例 6)

268	251	*	JF02	私はあんまり接客、好きじゃないし。
269	252	*	JF02	裏でやってるほうがいいよ <2人笑い>。
270	253	*	JF02	(沈黙 3 秒) <u>なんか</u> 、ちょっと、うーん、向いてないよ、やっぱし。

#### 4.4. 引用を示す「なんか」

定義：引用を導くための前置き表現として使われる「なんか」である。この場合も話者交替はせず、同一話者の発話の中で、「なんか」が文中に現れる。

例 7)

231	216	*	JBF01	日本は招待状出さないとこないですね。
232	217	*	JSF02	そうですね。
233	218	*	JSF02	だから最初ね、 <u>なんか</u> “来ていいよ” って言われて (うん) びっくりしちゃって。

上記の定義に従った分類結果を表 4 に示す。

表 4 談話機能を持つ「なんか」の話者ごとの使用分類

話者交替	分類	中国語母語話者	日本語母語話者	計
あり	発話権の獲得を和らげる「なんか」	0 (0%)	17 (100%)	17 (100%)
なし	発話権の維持を示す「なんか」	4 (30.8%)	9 (69.2%)	13 (100%)
	間つなぎを示す「なんか」	0 (0%)	8 (100%)	8 (100%)
	引用を示す「なんか」	0 (0%)	3 (100%)	3 (100%)
	計	4 (9.8%)	37 (90.2%)	41 (100%)

表 4 で分かるように、日本語母語話者の発話では、発話権の獲得を和らげる「なんか」の使用が最も多く見られた。中国語母語話者の発話では、発話権の維持を示す「なんか」の使用のみ見られた。

## 5. 「なんか」のポライトネス効果

ここでは、まず本稿における基本状態を同定してから、次に「なんか」の機能のポライトネス効果について述べる。

### 5.1. 本稿における基本状態

「基本状態」は、ディスコース・ポライトネス理論の最も重要な点の一つである。特定

の談話の「基本状態」は、ポライトネス効果を相対的に捉えるために同定する必要があるものである。

まず、「なんか」を含む発話文数が総発話文数に占める割合を表5に示す。

表5 「なんか」を含む発話文数が総発話文数に占める割合

会話	「なんか」を含む発話文数	総発話文数	割合 (%)
中国人1-日本人1	12	427	2.8
中国人2-日本人2	5	417	1.2
中国人3-日本人3	24	428	5.6
計	41	1272	3.2

発話文数から見た場合、「なんか」を含む発話文数が総発話文数に占める割合は、全体的に約3.2%である。つまり、日中母語話者の接触場面における自然会話において「なんか」を含む発話文が4%以下の状態であること、逆に言うと「なんか」を含まない発話文が96%以上の状態であることが、本研究における「基本状態」であると言える。ここで、発話文数の割合が4%以下である「なんか」を含む発話文は基本状態から離脱した「有標行動」であると言える。

次に、発話文から見た場合、「なんか、ぜんぜん違うよ」「なんか、外国で買い物する時は値段すごく高く言われますよね」などのような発話で、「なんか」を取り除いても「ぜんぜん違うよ」、「外国で買い物する時は値段すごく高く言われますよね」と発話文として成立する。つまり、「なんか」を含まない発話文が「基本状態」であり、「なんか」を含む発話文は基本状態から離脱した「有標行動」であると言える。

よって、発話文数からみても、発話文自体からみても「なんか」を含む発話は基本状態から離脱した「有標行動」であり、「有標行動」は基本状態から離れるため、何らかのポライトネス効果が生まれる。

まとめると、「なんか」を含む発話はディスコース・ポライトネス理論の観点から捉えると、会話においてポライトネス効果を生み出す言語行動であると言える。

## 5.2. 機能のポライトネス効果

5.2.では、ポライトネス効果の定義を定めてから、機能、ポライトネス・ストラテジー及びポライトネス効果の関係について示す。

### 5.2.1. ポライトネス効果の定義

本稿では、「なんか」を含む発話がポライトネス効果を生み出すと捉え、宇佐美（2008a: 162）に従い、ポライトネス効果を以下のように定義した。

(1) プラス効果

2 人の間に笑いがおこるなど、心地よい効果をもたらす「なんか」を含む発話。  
また、対人調節機能を効果的に果たす「なんか」を含む発話。

例 8) 発話権の獲得を和らげる「なんか」(話者交替あり)

77	68	*	中国人 1	あー、長春か…。[つぶやくように]
78	69	*	中国人 1	<わたし>  < 【。
79	70	*	日本人 1	】 <結構>  < 寒いですよー？。[→]
80	71	*	中国人 1	え、いつ行ったの？。
81	72	*	中国人 1	去年の<夏…>  <。
82	73	*	日本人 1	<えと>  <、く、9月ー。[↑]
83	74	*	中国人 1	9月、寒くないよ (<笑い>)。[少し早口で]
84	75-1	/	中国人 1	9月…、
85	76-1	/	日本人 1	<u>なんか</u> 、日本、 ⇒発話権の獲得 相手と異なる意見を述べる際の前置き
86	75-2	*	中国人 1	<秋でしょ?>  <。
87	76-2	/	日本人 1	<日本よりもさむ>  <、
88	77-1	/	中国人 1	あっ、<もちろん>  <、結果的に話がスムーズに進む

例 9) 発話権の獲得を和らげる「なんか」(話者交替あり)

306	281-2	*	日本人 1	<ち、長>  < 春ま<で>  <。
307	283	*	中国人 1	<あー>  <。
308	284	*	中国人 1	わたしのー、大学はー、大連です。
309	285	*	日本人 1	あっ、大連なん<ですか>  < 【。
310	286	*	中国人 1	】 <はい>  <、「大学名 2」学院。
311	287	*	日本人 1	<u>なんか</u> 大連と長春、だいぶ違いますよね？。 ⇒発話権の獲得 自分の考えを相手に押し付けない
312	288	*	日本人 1	<都会と…>  <。
313	289	*	中国人 1	<ぜんぜん、雰囲気>  < が違います。結果的に話が
314	290	*	日本人 1	<違いますよねー>  <。スムーズに進む

例 8) と例 9) は同じく日本語母語話者が発話権を獲得して発話する際に、中国語母語話者と異なる意見を述べるか、あるいは自分の考えを相手に押し付けないための前置き表現として「なんか」が使われている。発話権の獲得は、言い換えると話し相手から発話権を奪うことになるが、そういう侵害を和らげるために「なんか」が使われると考えられる。中国語母語話者は、日本語母語話者の発話を受けて気分を害することなく話を続け、日本語母語話者と見解の一致を示すだけでなく、会話の流れからみると、その先も興味津々に話題を広げていって、話がスムーズに運ばれている。

## (2) ニュートラル効果

言語的談話効果，特に丁寧と感じるわけでも不愉快でもない効果をもたらす「なんか」を含む発話。

### 例 10) 発話権の維持を示す「なんか」(話者交替なし)

148	135	*	日本人 2	で、日本に来てから、テーマが変わったん、です <かね?>  < 。 [「ですかね」はほとんど聞こえないくらいの大きさで]
149	136	*	中国人 2	<テーマ>  <  はー、やはり、うん、試験が、 <u>なんか</u> 、試験が参加、 した前にー、決まったばかり <です>  < 。
150	137	*	中国人 2	しかもー、 <u>なんか</u> 、大学に入って、また、テーマは変わりました <2人で笑い>。
151	138	*	日本人 2	変わりますよねー <笑いながら>。
152	139	*	日本人 2	わたしも… <笑いながら>。
153	140	*	中国人 2	どうしようかな。[独り言のように]
154	141	*	中国人 2	大変ですよー、 <修論>  < 。
155	142	*	日本人 2	<大変>  <  ですよ <ねー>  < 。

## (3) マイナス効果

不愉快な、失礼だと感じる効果をもたらす「なんか」を含む発話。

本会話データにおいてマイナス効果を生む「なんか」の使用は見当たらなかった。

### 5.2.2. 機能，ポライトネス・ストラテジー及びポライトネス効果

本稿の会話データにおいて，日本語母語話者の発話では発話権の獲得を和らげる「なんか」の使用が最も多く，中国語母語話者の発話では発話権の維持を示す「なんか」の使用のみ見られたのが特徴的な傾向だと言える。それをさらに，表 6 で示すようにポライトネス・ストラテジー及びポライトネス効果の面から分類した。

表 6 機能，ポライトネス・ストラテジーと効果の関係

談話機能	ポライトネス・ストラテジー	ポライトネス効果
発話権の獲得を和らげる「なんか」	話し手のポジティブ・フェイスの保持 聞き手のネガティブ・フェイス侵害の和らげ	プラス効果
発話権の維持を示す「なんか」	話し手のポジティブ・フェイスの保持	ニュートラル効果

発話権を獲得するというのは，相手の発話権を奪うことになるのでネガティブ・フェイスの侵害にあたるが，そのフェイス侵害行為を和らげるための前置きとして使われる「なんか」を含む発話の使用により，結果的には気分を害さずにそのさきの話がスムーズに進むプラス効果を生み出すと考えられる。

ポライトネス効果の面から言うと、日本語母語話者の発話にはプラス効果をもつ「なんか」とニュートラル効果になる「なんか」が見られたが、中国語母語話者の発話にはニュートラル効果になる「なんか」しか見られなかった。

つまり、両話者の発話には、対人調節機能を効果的に果たすプラス効果をもつ「なんか」の使用の有無に差が見られた。

## 6. 日本語教育への応用

「依頼」場面を例として、日本語教育での「なんか」の提示について触れたい。

### 例 11) 親しい男性同士の会話

話者	発話内容
JBM07	さきの、2限の授業の「授業名」の休んじゃったんだけど。
JYM59	はい。
JBM07	なんかノートとってたりしたら貸してくれない？。(なんか+～たら+～てくれる)
JYM59	いいよ。

### 例 12) 親しい男女友人の会話

話者	発話内容
JBM11	この間のさあ、米文学の授業でさあ、あのなんか、プリント配ったらしいんだけどさ、俺ちょっといかなかったらさあ、プリント貸してほしいんだけど…。(なんか+理由説明+～てほしい)
JSF22	あ、うん、いいよ。
JBM11	うん。

例 11) と例 12) は同じく、休んだ授業のノートを貸してくれるように依頼する場面である。ここで、文型「～てくれる」「～てほしい」のほかに、「なんか」の使用効果についても言及することができる。このような自然会話素材をもって、「依頼する」といった相手にかける負担がある場面における「なんか」の使用例が提示できる。ほかに「指示する」「要求する」「禁止する」など相手にかける負担が重い場面においても「なんか」がよく使われている。トランスクリプトと音声を組み合わせた自然会話素材を活用して、場面ごとの「なんか」の使用例を効率的に提示できるのではないかと考える。

## 7. おわりに

本稿において、日本語母語話者と中国語母語話者の「なんか」の使用に関する共通点は、ニュートラル効果になる「なんか」の使用が両話者に共通して見られたことである。適切な範囲内に収まる行動は適切行動と見なされ不快感をもたらさないので、ポライトネス効果の観点からはニュートラル効果になる。言い換えると、口癖のように使用している「な

んか」をポライトネス効果の観点からみた場合は、適切行動にあたる。

両話者の「なんか」の使用に関する相違点は、プラス効果を生む「なんか」の使用の有無に差が見られたことである。ポライトネス効果の観点から見た場合、日本語母語話者の発話には対人調節機能を効果的に果たすプラス効果をもつ「なんか」の使用が見られたが、中国語母語話者の発話にはプラス効果を生む「なんか」の使用が見られなかった。

今後、「なんか」をさらに詳細に分類し、その使用効果について検証すること、日本語教育で「なんか」をより詳細に提示できることを課題とする。

## 謝辞

本稿はグローバル COE プログラム「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」（東京外国語大学実施）の支援を受けたものである。ここに謝意を表したい。

## コーパス

宇佐美まゆみ監修（2007a）『BTS による多言語話し言葉コーパス—日本語会話 2』（日本語母語話者と学習者の会話）

———（2007b）『BTSJ による日本語話し言葉コーパス 1（初対面・友人、雑談・討論・誘い）』

## 引用文献

飯尾牧子（2006）「短大生の話し言葉にみる談話標識『なんか』の一考察」『東洋女子短期大学紀要』38 pp. 67-77

宇佐美まゆみ（1998）「ポライトネス理論の展開：ディスコース・ポライトネスという捉え方」東京外国語大学日本課程・留学生課（共編）『日本研究・教育年報 1997 年度版』、東京外国語大学 pp. 147-161

———（2001）「談話のポライトネス—ポライトネスの談話理論構想—」『談話のポライトネス（第 7 回国立国語研究所国際シンポジウム報告書）』国立国語研究所 pp. 9-58

———（2002）「連載 ポライトネス理論の展開」1-12『月刊言語』31（1-13）大修館書店

———（2008a）「相互作用と学習—ディスコース・ポライトネス理論の観点から」『講座社会言語科学第 4 巻教育・学習』ひつじ書房 pp. 150-181

———（2008b）「ポライトネス理論研究のフロンティア—ポライトネス理論研究の課題とディスコース・ポライトネス理論」『社会言語科学』11(1)（特集「敬語研究のフロンティア」）社会言語学会 pp. 14-22.

内田らら（2001）「会話に見られる『なんか』と文法化：『前置き表現』の『なんか』は単なる口ぐせか？」『東京工芸大学工学部紀要』24(2) pp. 1-9

- 林千賀 (2006) 「ディスコース・マーカ―『なんか』の発達―意味の漂白化―」『昭和女子  
大学大学院言語教育・コミュニケーション研究』1 pp. 39-51
- Brown, P. and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge  
University Press
- Usami, M. 2002. *Discourse Politeness in Japanese Conversation: Some Implications for a  
Universal Theory of Politeness*. Hituzi Syobo.